

財団法人結核予防会創立70周年記念 第60回結核予防全国大会を顧みて



財団法人結核予防会東京都支部
副支部長 石館 敬三

平成21年3月18日、天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、財団法人結核予防会創立70周年記念第60回結核予防全国大会式典が東京都内ホテルニューオータニで開催されました。先立って3月17日には同ホテルで研鑽集会が開催され、結核予防会総裁秋篠宮妃殿下のご臨席の下に催されました。全国から延べ約1,100名のご参加を得ております。

3月18日の大会式典においては、秩父宮妃記念結核予防功労賞第12回受賞者の表彰が行われた後、第60回結核予防全国大会決議文及び宣言文が採択されました。決議・宣言文は、国内的には結核対策の充実に努めるとともに結核医療に関する診療報酬の適正化を求め、世界に向けてはストップ結核ジャパンアクションプランの実施、特定健診・保健指導の推進やCOPDをはじめとする呼吸器疾患対策を進めることなどの内容が盛り込まれています。「結核と文学の世界」と題する辻井 喬氏の心に残る特別講演の後、式典では各界のご来賓の方々から結核予防会に対する期待が寄せられ、第60回目の節目にふさわしい有意義な大会となりました。

○支部長会議

財団法人結核予防会理事長 仲村英一氏及び、東京都支部副支部長 石館敬三の挨拶の後、石館副支部長の司会の下に「結核問題と本会事業」をテーマに以下の4つの講演と協議を行いました。

「わが国の結核対策の現状と課題」

厚生労働省健康局結核感染症課

課長 梅田 珠実 氏

「結核予防会の使命と国際協力」

結核予防会結核研究所

所長 石川 信克 氏

「呼吸器疾患、特にCOPD対策と結核予防会の使命」

結核予防会複十字病院

院長 工藤 翔二 氏

「特定健診・特定保健指導の展望と結核予防会の使命」

結核予防会第一健康相談所

所長 岡山 明 氏

講演の後、本部金子洋専務理事から、結核医療費の診療報酬適正化に関する要請行動について補足説明がありました。

支部長会議では、夫々の議題につき熱心な討議が交わされましたが、なかでも特定健診・保健指導については、その実施のあり方について抜本的に見直すべきであるとする問題提起と強い要望があったことを申し添えます。

○全国結核予防婦人団体連絡協議会理事会及び総会

中畔都舎子会長が議長となり進行しました。第1回理事会では、「平成20年度事業報告並びに収支決算報告」「平成21年度事業計画案・収支予算案」について山下武子理事より説明がされ、新潟県神田アヤ子、岡山県藤本貴子両監事による収支決算報告を行いました。また、4地区5名の役員を選任がなされた後、総会ではまず全員で「健康の歌」を合唱し、第1回理事会の議案報告を審議、承認されました。第2回理事会では新理事・監事の紹介ののち会長・副会長の互選について審議され承認され無事閉会しました。

○支部長午餐会

恒例の支部長午餐会は、総裁秋篠宮妃殿下のご臨席の下にedoRoomにおいて和やかに行われました。

○研鑽集会

【セッションI】「人形劇」

テーマ：結核のない世界へ

—罹患率100万対1をめざして—

結核研究所対策支援部長 小林典子氏の司会の下「発病予防」「患者発見」「医療」の3点から10年後を見据えた対策を考え、人形劇と映像による構成で進められました。途中クイズを挟みながら楽しく学べる趣向でした。

【セッションII】「パネルディスカッション」

テーマ：パートナーシップ!!

前WHO西太平洋地域事務局長、現自治医科大学地域医療学センター公衆衛生学部門教授の尾身 茂氏の司会の下、結核研究所対策支援部保健看護学科長の永田容子氏をアシスタントに、パネルディスカッション方式で行われました。スピーカーの方々は患者さん代表として成瀬匡則氏、マスコミの立場で医療ジャーナリストの田辺 功氏、保健医療団体の立場で特定非営利活動法人AMDA社会開発機構理事長の鈴木俊介氏、国際保健分野から西山正徳氏、芸術家の立場で東京藝術大学准教授の中村政人氏、政界からストップ結核パートナーシップ推進議員連盟の浜四津 敏子氏、またコメンテーターとして外務省国際協力局専門機関課長の早川 修氏、厚生労働省の結核感染症課長の梅田珠実氏と実に幅広く、さまざまな分野から討議が行われました。尾身氏の総括によりパートIIを終了しましたが、パートナーシップが動き始めていることに心強い思いをいたし連携の重要性を実感させられた研鑽集会でした。見事な企画に敬意を表するものです。

○決議宣言起草委員会

あらかじめ指名されていた起草委員による第60回大会の決議文及び、宣言文案を東京都支部の石館副支部長を委員長に、本部の金子専務理事を副委員長に選出し検討を行いました。

例年議論が白熱し時間が長引く事が多い会議ですが、今年は長文の割には、すんなりとまとまりました。たたき台となった原案文の出来が良かったためと思います。決議文宣言文は9ページに載掲のとおりです。

○特別講演

「結核と文学の世界」 辻井 喬 氏

ご自身の少年時代の生い立ち、青年時代の結核との闘いを通じ次第に文学に傾倒していく過程を軸にした

お話で印象深い講演を伺うことができました。

○大会式典・議事

大会第2日目の式典は、天皇皇后両陛下の行幸啓の下、ホテルニューオータニ「鶴の間」を会場に開催されました。結核予防会理事長仲村英一氏の開会の言葉に始まり、地元東京都を代表し東京都副知事 山口一久氏、結核予防会会長 青木正和氏より挨拶がありました。引き続き秩父宮妃記念結核予防功労賞第12回受賞者表彰に移り、世界賞にはアメリカの結核病学の第一人者 フィリップ・ホープウェル氏が選ばれ、国際協力功労賞1名、保健看護功労賞3名、事業功労賞には2団体と9名の個人に総裁秋篠宮妃殿下から表彰状が授与されました。

式典では、天皇陛下から結核対策に永年努力してきた関係者に対して労いのお言葉が寄せられました。更に「本大会を契機として、関係者が一層力を合わせ結核予防事業に取り組み、人々の健康のために力を尽くされることを願います」とお励ましのお言葉を賜りました。

引き続き行われた総会では、東京都福祉保健局長安藤立美氏が議長に、本部専務理事 金子 洋氏が副議長に選出され議事が行われました。

先ず、全国支部長会議及び研鑽集会の報告を、本部の仲村理事長が行い、続いて大会の決議・宣言文について、決議文を東京都支部副支部長 石館が、宣言文を東京都地域婦人団体連盟事務局次長 長田三紀氏が朗読し、満場一致で採択されました。

また、次回開催は鳥取県ということで承認されました。

本大会が成功裡に終了できましたのは厚生労働省、外務省及び、地元東京都をはじめ多くの関係団体、関係者の皆様のご支援、ご協力の賜物であり感謝の念に堪えません。

本大会に参加された皆様が、本大会を契機に国内的にも国際的にも連携を強め、一層強力な結核制圧に向けての途を歩まれることを期待し、大会の報告といたします。

研鑽集会・セッションI

「人形劇」結核のない世界へ ～罹患率100万対1をめざして～

「結核予防会70年のあゆみ」

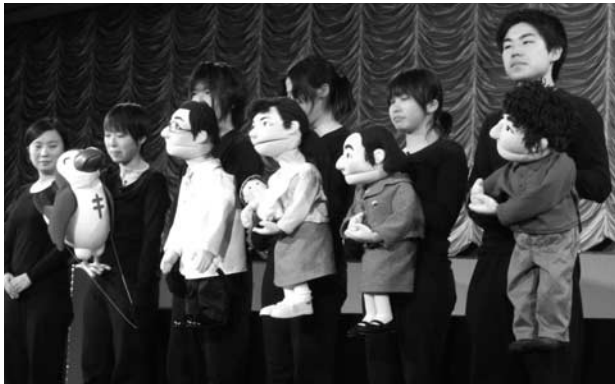
研鑽集会セッションIは、まず「結核予防会70年のあゆみ」と題し設立70年を振り返る映像上映から始まりました。

昭和14年に結核予防会ができた当時、結核が死亡要因のほぼ首位にあったこと、その当時の本部や新山手病院の前身となる保生会館、保生園などが第一生命保険相互会社からの寄附を受けて設立されたことなどが貴重な写真とともに紹介されました。また、現在も続く昭和24年から始まった「結核予防週間」や「結核の統計」など当時の結核の現状や病気に対する普及啓発の資料などが紹介されました。

また、長野県から始まった結核制圧のための全国の婦人会活動の様子や結核予防全国大会に積極的に力をお貸し下さった前総裁秩父宮妃殿下のご様子も示されました。その後亡くなられた妃殿下の御遺志を継がれた、現総裁秋篠宮妃殿下のもと今後一層の発展を目指して上映は締めくくられました。

「人形劇～ある家族の物語～」

「人形劇」1幕は、ある一家がBCG接種のため赤ちゃんを連れて診察室を訪れるところから物語は始まりました。どこにでもありそうな、お父さんお母さんとおばあちゃんの家族が、診察室での先生とのやりとりを通して、BCGの基礎知識、国による医療制度の違いなどが説明され、接種の問題点や今後日本におけるBCG接種のあり方についての問題点を分かりやすく演じられました。



学生達により人形劇は演じられました

間をはさんで、「10年後の結核対策を見据えて～外国人の結核問題」とのテーマでドキュメンタリー映像が流されました。

外国、特に結核の高蔓延国から日本にやってくる若い世代の結核発病率の増加傾向が問題となっていることを踏まえ、結核予防会第一健康相談所で通院治療を受けている20代から30代の在日外国人女性へのインタビューや、第一健康相談所で行われている都内の保健師達との意見交換会を通じて、我が国における問題点を探りました。

「人形劇～第2幕～」

第2幕では、一家のお父さんが、診察室で先生から結核と診断されることから始まりました。お父さんは、初めこそしっかり者のお母さんのおかげもあって、きちんと薬をのんでいましたが、咳など症状が治まるにつれて薬をのむのを止めてしまいます。しばらくすると、再び咳をする様になり診察を受けに行くと、排菌していることがわかります。途中で薬を止めたことで、お父さんには入院と多剤耐性結核の恐怖が。



クイズで参加者に呼びかける結核研究所星野放射線学科長

劇は結核の基礎知識について結核研究所対策支援部の協力を得ながら5人の大学生による、企画・脚本・演出・人形操作で進められました。あいだに参加者への〇×クイズや人形を操っていた黒子学生達が、突如DOTS戦隊に変身して、お父さんの服薬を見届けたり、多剤耐性結核菌をやっつけたりと、会場の参加者も楽しみながら結核の基礎知識の再確認をしました。

最後に結核研究所石川所長のまとめにより研鑽集会I「人形劇」は終了しました。

なお、今回登場した人形は今後結核研究所から普及啓発のために台本と一緒に希望により貸出しを行います。

(文責：編集部)

「パネルディスカッション」 パートナーシップ !!

医療ジャーナリスト

田辺 功



「結核のない世界」をめざすには、各種専門家、国民やメディアの支援、行政の後押しなどいろんな分野の人たちの協力が不可欠です。秋篠宮妃殿下を迎えて行われたセッションⅡのパネルディスカッションではパートナーたちの本音が聞かれました。

司会はWHO（世界保健機関）の西太平洋事務局事務局長から転じたばかりの尾身茂・自治医科大学教授（公衆衛生学）、アシスタントは永田容子・結核研究所保健看護学科長です。「日本に戻って一番驚いたのはパスモ。JRも地下鉄も私鉄もOK。パスモのような各界の連携が大事だ」との尾身さんの挨拶から始まりました。

最初の発言者は34歳の結核患者の成瀬匡則さんでした。「えっ!! 僕が結核!? …でもそれって何ですか?」

2007年5月から10月まで多剤耐性結核で2つの病院に入院しました。会社員の時、風邪症状から日中微熱、夜高熱になり、結核と診断されました。「長期入院中、不安、怒りでいっぱいだった。悲惨な患者を見て、なんというところに来たのかと思った。孤独で、回りには笑顔もなく、無言。プライベートも自由もない。鉄格子のない刑務所だ。患者の気持ちをいろんな人に伝えたい。事実を訴えることで感染を未然に防ぐ大切さを啓発していきたい」と語ると、会場は水を打ったように静まりました。

二番手は私、田辺でした。「高くないメディアの関心」です。結核の新規患者は2006年が26,384人。大手新聞の記事は年200本ほどありますが、著名人の経歴が多く、社説はゼロ。

病気そのものの記事は少なく、目立つのは集団発生の報告ばかりです。08年4月から09年2月まで29件。また、結核治療は不採算治療の代表で入院1人1日ごとに1万円の赤字です。

「結核はいまの病気とメディアに知ってもらおう努力

をみんなでしなければ」。

「ザンビアからの報告：DOTSを支えるコミュニティの底力」と題したのは鈴木俊介・AMD A社会開発機構理事長です。鈴木さんたちは結核とHIV（エイズ）との二重感染地域、アフリカ南部ザンビアのスラムで現地の人たち（コミュニティ）と一緒に救援活動をしています。HIV患者の死因のトップは結核で、結核患者の7、8割がHIVに感染しています。

西山正徳・医薬戦略研究所代表は「国際保健分野から」と題し、鈴木さんの活動を大所高所から補いました。2000年の九州・沖縄サミットで初めて保健問題が取り上げられたこともあり、日本はこの分野で貢献しています。エイズ、結核、マラリア対策です。しかし、西山さんは「日本の政治の低迷もあり、医師は内向きになり、資金面からも国際貢献がしにくくなっている」「ボランティアと公的部門のパートナーシップで日本の『知』を世界に」と訴えました。

中村政人・東京藝術大学絵画科准教授は「結核予防に対してアートは何ができるか?」でした。「アートとは人に伝えたい、やむにやまれぬ気持ち」と中村さん。子どもたちが自分が要らないものを持ち寄り、ポイントをためて欲しいものと交換するような場など新しい形のアートの例を示し、結核予防にどうアートを取り入れるかを話しました。

また、浜四津敏子・ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟副会長は07年11月に208人の国会議員が賛同して結成されたストップ結核パートナーシップ日本を支援する同連盟の活動と、自身の思いを熱く語りました。最後に早川修・外務省国際協力局専門機関課長、梅田珠実・厚生労働省健康局結核感染症課長のコメントで、1時間半はアッという間に終了しました。

結核予防会全国支部長会議報告



ホテルニューオータニで開催されました

会議は、本部仲村理事長、東京都支部石館副支部長、厚生労働省結核感染症課梅田課長から挨拶があり、開催地の東京都支部石館副支部長が議長となり「結核問題と本会事業」について協議に入った。協議事項は次の5点であった。

「わが国の結核対策の現状と課題」

厚生労働省梅田課長

我が国の結核罹患率の推移とこれまでの結核対策、次に平成19年以降の最近の結核対策について、感染法等に基づく結核対策の概要が述べられ、医師の届出基準、入退院基準、公費負担医療などの結核関係法規の改正を中心に説明された。続いて今後の結核対策として、①外国人、ホームレス、非正規雇用者など結核ハイリスク層への対策など、結核対策の強化、②日本版21世紀型DOTS戦略推進、③平成21年度結核対策関係予算（案）の概要について説明された。具体的には、DOTSの推進、結核対策特別促進事業、住所不定者等に対する結核対策推進事業などが紹介された。

「結核予防会の使命と国際協力」

結核研究所石川所長

地球的規模でいかに結核による負担が大きいかについて説明され、これに対して世界的な対応が強化されている中で日本の役割について、日本政府の対応、ストップ結核ジャパンアクションプランについて述べられた。そして、ミレニアム開発目標に呼応した2006年からのストップ結核新戦略にもふれ、結核予防会の役割は増大しているとした。国際事業のこれまでの実績や現在のプロジェクト、特に「マニラ市スラム地域の結核対策支援」、「ザンビア住民参加によるTB/HIV早期発見・DOTSプロジェクト」が紹介され、これらに複十字シール募金による益金も使われており、今後も予防活動に貢献し、顔の見える地球市民活動、平和活動をと結ばれた。

沖縄県支部から、アフリカの対策について詳しく知りたい、沖縄県での外国人の結核状況から国際協力に力を入れたいなどの意見が述べられた。

「呼吸器疾患、特にCOPD対策と結核予防会の使命」

複十字病院工藤院長

肺が壊れていく肺気腫、気道分泌過剰状態に気流の通りにくさ加わった慢性気管支炎などを総称したCOPD（慢性閉塞性肺疾患）は、2020年には死因順位3位と予測されている。上位10位までの中に呼吸器疾

患は4種あり、COPDはその最上位である。症状は息切れ→咳→痰→呼吸不全→在宅酸素療法となり、喫煙が主な原因である。禁煙により予防可能で、壊れた肺は元には戻らないが薬で治療が可能で生存を長くできると説明された。問題は無症候性による発見困難で、95%が未診断である。

結核予防会の質問票によるCOPD共同研究の成果が期待される。「肺年齢」の提唱や「呼吸の日」の普及啓発で禁煙の動機付け、肺を大切にしよう国民へのアピールを行い、COPDの早期発見に今後も努力するので協力をお願いしたいと結ばれた。

京都府支部から、共同研究と禁煙成果を結びつけたエビデンス構築の必要性、研究の推進に期待することについて意見が述べられた。

「特定健診制度における結核予防会の使命」

第一健康相談所岡山所長

昨年4月から開始された特定健診・保健指導は、厚生労働省国保ヘルスアップ事業調査および結核予防会支部調査から、受診率の低迷、保健指導対象者の少なさという緊急課題がわかっている。この課題解決のための方策として、①受診率の詳細な分析、地区別比較など現状把握、②連携等の実施体制・周知方法・健診日程の工夫などの実施方法を見直し、③調査結果から見た受診状況のよい保険者の取り組みと特徴を参考にすることを挙げ、健診受託機関はこれらを保険者へ企画・提案できる総合的な健康増進機関となって今後の健康診断を変えようと結ばれた。

宮城県支部から、特定健診問題提起と要望の意見が述べられた。

「連絡事項」

本部金子専務理事

ストップ結核パートナーシップ日本と結核予防婦人団体連絡協議会作成の「結核診療報酬の適正化と公的補助の要望：支援・署名のお願い（案）」資料について説明され、（案）が確定される時点で本会も支援する考えであると協力を呼びかけた。

（文責：編集部）

厚生労働大臣 祝辞（金子善次郎 厚生労働大臣政務官 代読）

本日ここに、天皇皇后両陛下、財団法人結核予防会総裁秋篠宮妃殿下の御臨席を仰ぎ、財団法人結核予防会創立70周年記念第60回結核予防全国大会が開催されますことを心からお慶び申し上げます。

始めにただいま秩父宮妃記念結核予防功労賞を受賞されました皆様に心からお祝いを申し上げます。この賞は長年に渡り財団法人結核予防会総裁を務められた秩父宮妃殿下の御遺徳を偲んで創設されたものであり、大変榮譽ある賞でございます。皆様のこれまでのご尽力とご功績に対し深く敬意を表する次第です。

また、財団法人結核予防会にはこの70年に渡り我国の結核対策に大きく寄与されるとともに、技術協力、人材育成などを通じて国際的にも重要な役割を果たしていただいておりますことに厚く御礼申し上げます。

さて、我国の結核の罹患状況は飛躍的に改善されて参りましたが現在においてもなお、年間約25,000人の新規結核患者が発生するなど結核は我国の主要な感染症です。

また世界では結核はいまだに人類を脅かす深刻な感染症であり、国際的な協力も求められております。

このようななか昨年我国において、外務省、厚生労働省、JICA、財団法人結核予防会、ストップ結核パートナーシップ日本、の5者により、ストップ結核ジャパンアクションプランを発表したところであります。厚生労働省としましては、結核の克服という目標に向け地方自治体や関係団体の皆様と連携を図りながら国内外の結核対策を一層推進して参ります。そのためには、財団法人結核予防会を始めとする関係者の皆様のお力添えが不可欠であり、引き続きご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後に、本大会の開催に多大の労をおとりいただいた、東京都ならびに財団法人結核予防会を始めとする関係各位に対し深く御礼申し上げますとともに、本日ご参加の皆様方の御健勝と今後ますますのご活躍を祈念いたしまして私のお祝いの言葉といたします。

平成21年 3月18日
厚生労働大臣 舩添 要一（代読）

東京都副知事 挨拶

第60回の記念すべき結核予防全国大会が、本日、天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、秋篠宮妃殿下の御臨席の下、この首都東京において盛大に開催されますことは誠に光栄であり、喜ばしいことでございます。都民を代表し皆様に心から歓迎いたします。

かつて結核は、日本では国民病とまで言われたこともある感染症ですが、医学・医療の進歩や公衆衛生対策の向上により、現在では適切な治療を受ければ完治できる病気となりました。

しかしながら、結核は、決して過去の病気となった訳ではありません。残念なことに世界的には日本は「中蔓延国」と評価されており、多剤耐性結核やHIV感染症との二重感染など新たな課題も出現してきています。

こうした課題に対応していくためには、今回ご参加された皆様一人ひとりが「結核のない世界」を目指して、行政と民間との枠を超えて取り組んでいく必要があります。

東京都は平成19年に、現代型・都市型の結核に焦

点をあて、東京都結核予防推進プランを策定いたしました。

保健所や区市町村とともに医療関係者の皆様と連携しながら、今後とも着実に予防対策を進めてまいります。

本大会を契機として関係者間相互の交流が進み、全国的な結核予防対策を一層促進することができれば、主催者の一人として幸いに存じます。

どうぞ皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。

結びに、第60回結核予防全国大会の開催にあたりご支援いただいた厚生労働省をはじめ関係機関の皆様には厚く御礼申し上げますとともに、本大会の成功にご参加いただきました皆様のご健勝とご活躍をお祈りいたしまして私のご挨拶とさせていただきます。

平成21年 3月18日
東京都副知事 山口 一久

結核予防会会長 挨拶

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、総裁秋篠宮妃殿下の御台臨をいただき、「結核予防会創立70周年記念第60回結核予防全国大会」がこのように盛大に開かれましたことを、皆様とともに心からお喜び申し上げます。結核予防会は、香淳皇后の御令旨を戴いて昭和14年に創立されて以来、関係諸機関と力を合わせ、民間団体の中心になって結核予防を進めてまいりました。わが国で最も高い結核罹患率を示した昭和25年には、10万対635.6という高い数字でした。今、世界で635を超える罹患率の国はスワジランドとナミビアの2カ国を見るのみです。それをこの70年19.8にまで減らしてきたことは、わが国が大いに誇りとするところです。

しかし、結核は、空気感染することと、感染後発病を免れても結核菌が持続生残菌となって、何年でも生き残り、条件が揃えばいつでも発病する病気です。集団感染が起こり、超高齢者の発病が後を絶たないのはこのためです。社会経済状況の影響を強く受けるのもこのためです。また、わが国が先進国では最下位群に留まっているのも、わが国の結核まん延が欧米より100年以上も遅く起こったため、今でも高齢者の多くが結核既感染で、体の中に持続生残菌を持っているからです。高齢化社会を迎え、様々な社会・経済的問題

を持つわが国では、結核対策の手をゆるめることはまだまだ許されません。

また、最近是非結核性抗酸菌症の罹患率が10万対6に近く、肺がん死亡率は10万対50を超えて増加中であり、COPDの患者は530万人と推測されるなど、呼吸器疾患の増加も著しく、メタボリック症候群も大きな問題です。結核予防会は創立以来、質の高い疾病対策を進め、広く国民の支持を受けてきました。予防会には、これらの問題への対応も期待されています。

さらに眼を世界に転ずれば、結核まん延がなお著しいアジア、アフリカなど多くの途上国から、結核対策に経験深いわが国への強い期待が寄せられています。

今後われわれは、さらに視野を広くし、学問の基礎の上に建てた疾病対策、健康増進策を、明るい希望を持って力強く進めていく決心であります。

終わりにになりましたが、関係機関、結核予防婦人会を始め多くの関係団体のご支援に感謝し、今後のご協力をお願い申し上げて、ご挨拶とさせていただきます。

平成21年3月18日
結核予防会会長 青木 正和

3月18日、第60回結核予防全国大会議事において、決議案を結核予防会東京都支部石館敬三副支部長より、宣言案を東京都地域婦人団体連盟長田三紀事務局次長からそれぞれ報告があり参加者から賛同の拍手をもって採択された。

第60回結核予防全国大会決議

我が国の結核罹患率は平成19年に初めて10万対20を切り、中まん延国から低まん延国への過渡期に入った。しかし、いまだに年間2万5千人以上の新規患者が発生し、我が国の主要な感染症である。最近の結核の特徴は、①患者の高齢化が進み、かつ合併症を伴っていること、②働き盛りの患者で、受診の遅れが依然として多いこと、③大都市や特定地域での罹患率が高いこと、特に社会経済的弱者に著しく罹患率が高いこと、④外国人の患者割合が増加していること、など質的な変化を示しており、それらに対する重点的対策の強化が必要である。

また、結核感染者の入院は保健所長や都道府県知事の勧告による政策医療の一環であるが、結核医療に対する診療報酬が低いことによって結核医療提供体制の確保が困難を極めており、結核医療費の適正な評価を行うべきである。

結核は、世界的には依然として大きな社会問題で、特に開発途上国では、他の健康問題と並び深刻な状況にある。それらの国々では、対策に必要な人材や技術が著しく不足している。このような状況の中、昨年5月にT I C A D IV（アフリカ開発会議）、7月に北海道洞爺湖G 8サミットが開催され、これを受けて、同7月に結核に関する国際シンポジウムが開催された。その中で、外務省、厚生労働省、国際協力機構、結核予防会、ストップ結核パートナーシップ日本の5者連名による「ストップ結核ジャパンアクションプラン」が発表され、官民が協力して世界の結核制圧に取り組む決意を示した。

また、7月からは、A C公共広告機構を通じ、国民に対する結核の正しい知識の普及啓発が積極的に開始された。

一方、呼吸器疾患対策としては、5月9日の「呼吸の日」にちなんだ記念フォーラムで「肺年齢」という概念が広く啓発されることになった。今後「肺の生活習慣病」と言われる慢性閉塞性肺疾患（C O P D）による死亡率が高まることが推測されており、生活習慣病対策の柱の一つとしてC O P D予防を加え、強力な禁煙運動を推進していく必要性がある。

我々は、国内の結核対策や国際協力を、強力に進めていくとともに、広く国民の健康に寄与するため、呼吸器疾患対策や生活習慣病対策等の事業をも推し進めてゆく。

よって、今大会において検討の結果、次のことを決議する。

- 一、 国および地方公共団体は、国内の結核対策として以下のことに努めること。
 - ① 感染症法に基づく科学的で実効性のある結核対策の充実に努めること。
 - ② 結核研究をより一層推進し、新診断技術や新抗結核薬の開発を進めるとともに結核対策のための人材育成を図ること。
 - ③ 結核医療に対する診療報酬を早期に是正し、崩壊の危機に瀕しつつある我が国の結核医療提供体制の確保、再構築を図ること。
- 二、 国は、結核の国際協力として以下のことに努めること。
 - ① ストップ結核ジャパンアクションプランにより官民が連携して、世界の年間結核死者数の1割（16万人）を救済することを念頭に置き、世界特にアジア及びアフリカにおける結核対策を支援すること。
 - ② 国（外務省、厚生労働省）は、ストップ結核ジャパンアクションプラン実施に向け必要な施策を実施するとともに、結核対策を含む保健分野に知見を有する関係団体の主体的活動を支援すること。
- 三、 国および地方公共団体は、結核予防の普及啓発や国際協力の貴重な財源となる複十字シール運動を盛り上げるため、関係者・団体への働きかけに努めること。
- 四、 国および地方公共団体は、特定健診・特定保健指導対策として以下のことに努めること。
 - ① 特定健診・特定保健指導は、2年目を迎え実態を考慮し制度の改善に努めること。
 - ② 特定健診・特定保健指導の推進を国民運動にしていいため、結核予防婦人団体連絡協議会と連携し、その普及啓発活動を支援すること。
- 五、 国および地方公共団体は、肺がんやC O P D等の呼吸器疾患対策として以下のことに努めること。
 - ① 「呼吸の日」（5月9日）、「肺の日」（8月1日）の諸行事をはじめ、国民に対する普及啓発に努めること。
 - ② 生活習慣病対策の柱の一つとしてC O P D予防を位置付け、調査・研究を支援するとともに健診を必須項目に加え、その予防と早期治療に努めること。

以上5項目を国および地方公共団体に要請する。

結核予防会は、本部、支部の活動を通じ、これらの実現に向けて一層の努力をするものとする。

以上決議する。

平成21年3月18日
第60回結核予防全国大会

第60回結核予防全国大会宣言

日本の結核罹患率は初めて10万対20を切り、低まん延国化への大きな一歩を踏み出した。しかしながら、我が国の結核を取り巻く状況は、合併症を伴う高齢患者の増加、大都市への集中化、外国人の患者割合の増加など、複雑化し質的な変化を呈している。

国内においては、科学的で実効性のある結核対策の充実に努めるとともに結核医療に対する診療報酬の早期適正化を求める。

世界に向けては、昨年7月に発表したストップ結核ジャパンアクションプランを確実に実施し、結核の制圧へ向け総力を挙げて取り組む。

さらに、特定健診・特定保健指導の推進や禁煙運動による肺がん、慢性閉塞性肺疾患（C O P D）をはじめとする呼吸器疾患対策をすすめ、国民に対する正しい知識の普及啓発に努め、人々が健康で明るい生涯を送れるよう組織一丸となって努力する。

以上宣言する。

平成21年3月18日
第60回結核予防全国大会



財団法人結核予防会 創立70周年記念 第60回結核予防全国大会

3月17日、18日の両日、第60回結核予防全国大会が開催されました。2日間を写真で振り返ります。

【3月17日】

この日は午前中、全国支部長会議、全国結核予防婦人団体連絡協議会（全結婦連）総会、決議・宣言起草委員会。午後より研鑽集会セッションI「人形劇」セッションII「パネルディスカッション」が行われ、夕刻6時30分より大会歓迎レセプションが開催されました。



支部長会議：東京都支部石館副支部長が議長となり「結核問題と本会事業」について協議が行われました。



全結婦連総会：中野会長が進行役となり、滞りなく総会は終了しました。



セッションI「人形劇」：研鑽集会セッションIでは、人形とドキュメンタリー映像を使って、BCGやDOTS、外国人の結核について紹介し、結核クイズで参加者も含め、会場は一体感に包まれました。



セッションII「パネルディスカッション」：テーマは「パートナーシップ!!」です。患者さん、マスコミ、保健医療団体、国際保健分野、ストップ結核パートナーシップ推進議員連盟、芸術家など幅広い関係者と共に、またコメンテーターには外務省、厚生労働省からもご発言いただきました。これからの結核対策に向けて、様々なご提案がありました。

【3月18日】

2日目は、午前10時より「結核と文学の世界」と題して、辻井喬氏の特別講演が行われました。講演終了後、天皇皇后両陛下の行幸啓を仰いで大会式典が行われました。式典では、天皇陛下のお言葉のなかで、自らが結核の治療薬の恩恵を受けたお一人であると話され、大きな反響を呼びました。



式典参加者を前に、お言葉を述べられる天皇陛下



特別講演で辻井氏は自らの結核体験を交え、トーマス・マン「魔の山」など結核文学に影響を受けたことをお話されました。



本会、仲村理事長による開会のことば



本会、青木会長によるあいさつ



保健看護功労賞を受賞した菊池，田中，土屋氏3名に表彰状を授与される総裁秋篠宮妃殿下



事業功労賞は2団体9名に対して、総裁より表彰状が授与されました。



大会議事では、決議文を東京都支部石館副支部長が読み上げました。



同じく宣言文を東京都地域婦人団体連盟長田事務局次長が読み上げました。



次期開催地は鳥取県と採決され、開催県を代表して結核予防会鳥取県支部岡本支部長から挨拶をいただきました。